集中豪雨とは

集中豪雨とは、台風の接近や線状降水帯（※）の発生により、狭い範囲で比較的短時間に大量の雨が降る現象です。

特に、線状降水帯が発生すると、災害発生の危険性が急激に高まります。

愛知県でも、平成12（2000）年の東海豪雨、令和5（2023）年6月2日や令和8(2026)年9月8日の大雨など、線状降水帯による大雨で大きな被害が発生しています。

（※）次々と発生する発達した雨雲（積乱雲）により、線状の降水域が数時間にわたってほぼ同じ場所に停滞し、大雨をもたらすもの。

1時間の雨の量と降り方

10~20mm	ザーザーと降り、雨の音で話し声がよく聞き取れない。
20~30mm	どしゃ降りで側溝や下水、小さな川があふれ、小規模のがけ崩れが始まる。
30~50mm	バケツをひっくり返したように降り、山崩れ・がけ崩れが起きやすくなる。都市では下水管から雨水があふれる。
50~80mm	滝のように降り、都市部では地下室や地下街に雨水が流れ込む場合がある。土石流が起きやすくなる。
80mm以上	息苦しくなるような圧迫感がある。雨による大規模な災害の発生するおそれが強く、厳重な警戒が必要となる。

「キキクル」を活用しよう

「キキクル」は、大雨などによる災害の危険度を色分けされた地図で確認できるツールです。
「いま」自分が危ないのかを知ることが出来ます。

キキクル　検索

防災気象情報をチェックしよう

気象庁は、大雨などにより災害リスクが高まるときに、「警報」などの防災気象情報を発表します。

避難の判断に役立てるため、防災気象情報のうち「大雨」「土砂災害」「氾濫」「高潮」に関する気象警報・注意報の名称には、とるべき行動との関係がわかりやすくなるように、レベル数字が付与されています。

防災気象情報は、気象庁のHPなどから確認できます

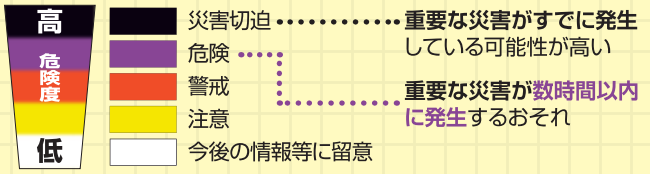
気象庁HP
https://www.jma.go.jp/jma/index.html

気象庁HPで確認できる主な情報の種類

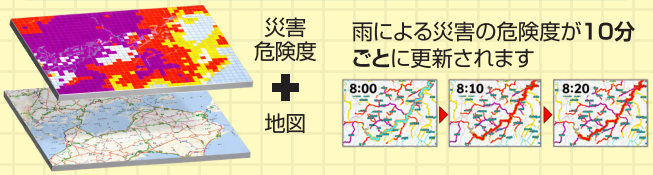
- ◎ 気象情報・注意報（大雨・土砂災害・氾濫・高潮など）
- ◎ 時系列情報（明日までの警報等の見通し）
- ◎ 早期注意報 —— 警報級の可能性を早めにお知らせ
- ◎ キキクル　など

「キキクル」の主な特徴

危険度を5段形に色分け



地図上にほぼリアルタイム表示



愛知県で発生した過去の主な風水害

伊勢湾台風

昭和34(1959)年9月21日にマリアナ諸島の東海上で発生した台風第15号は、発生後2日足らずで猛烈な台風に成長し、26日紀伊半島に上陸し、東海地方を中心に大きな被害を及ぼしました。



愛知県では、名古屋市や旧弥富町、知多半島などで激しい暴風雨の下、高潮により短時間のうちに大規模な浸水が起き、死者・行方不明者約3,300名に達する大きな被害となりました。

東海豪雨



平成12（2000）年9月11～12日、愛知県を中心に東海地方の広範囲にわたって大きな被害をもたらした豪雨災害です。2日間の積算降水量は多いところで600mm前後に上り、名古屋市周辺で多数の浸水被害が生じたほか、広い範囲で河道護岸の損壊、がけ崩れ、土石流などによる災害が発生し、交通網が寸断されて、伊勢湾台風以来の大被害をもたらしました。

昭和47年7月豪雨災害

昭和47（1972）年7月3日から全国的に降った大雨は、特に12日夜半から愛知県に大きな被害をもたらしました。矢作川沿いの三河地方では、先行降雨で地盤がゆるんでいたこともあり、山・がけ崩れが起き、旧小原村の31名をはじめ、豊田市、旧藤岡村、旧足助町などで死者64名、行方不明者4名の犠牲者を出す大災害となりました。



平成20年8月末豪雨災害

平成20（2008）年8月28日から30日にかけて、日本列島を縦断する形で停滞していた前線の影響により、南からの湿った空気が愛知県の全域に流れ込み、県内各地で局地的な短時間の非常に激しい雨が降りました。特に岡崎市では、29日には時間雨量146.5mmと全国歴代8位の猛烈な雨を記録し、各地で河川氾濫や内水などによる甚大な浸水被害をもたらしました。

